

## チャイルドの伝承バラッド集

### 三 井 徹

ハーヴァード大学のF・J・チャイルド(一八二五—一八九六年)が伝承バラッドのテキストを集大成〔註一〕してから既に七十年以上経った。その間には、部数の限られたリプリント版も出たが〔註二〕、その後、民謡研究者の増加、それにまた、一般の広義での民謡愛好熱の高まりにつれて、一九六五年にはついに多数の紙装版が出るに至った〔註三〕。この伝承バラッド集(*The English and Scottish Popular Ballads*—以後*ESPB*と略す)の偉大さについては、改めて詳述するまでもないことで、チャイルド以後の民謡研究者の間では、伝承バラッド、即ちチャイルドのバラッド集に収められている種類のバラッドと見做すのが普通になっていること、そして個々の伝承バラッドに触れる場合に、このバラッド集のバラッドの配列番号に従い、チャイルド何番と称するのがならわしになっているということだけからも察することは出来よう。併し、偉大であることに変わりはないにしても、この*ESPB*を、勿論、その儘に受け入れるわけにはいかない。

チャイルドにすぐ続いたバラッド学者のガマリ(*Gummere*)、キ

トレッチ、また起源説ではちがう立場をとったルイーズ・パウンド(*Pound*)にしても、チャイルドのバラッド集を全面的に受け入れていた。このチャイルド崇拜の態度は当然文学史家などにもその儘受け入れられ、*ESPB*中のバラッドが伝承バラッドの全てであり、それらの一篇一篇が伝承バラッドであると絶対視する見方がその後支配的となり、これは今に至るまでかなり続いていると言えるかもしれない〔註四〕。民謡学者の間では、*ESPB*と、それに先立つ一八五八年版〔註五〕との内容の比較をしたセルマ・G・ジェイムズの論文〔註六〕にはじまって、次第に、チャイルドのバラッド集を批判的に受けとめるようになってはきている。併し、それらの批判は一面的であるのが普通で、また、何かの序でにふれられていることが多く、このバラッド集を全般的に批判した文章は見当たらないし、誰しもが全般にわたる批判的態度をとって*ESPB*に対しているようにも思えない。文学史家、更には一般の民謡愛好者の場合には偉大さということのみ強調されて、*ESPB*は盲目的に信頼されているくらいがある。そういうわけで、ここで改めて、諸家の意見を参考にして、成る可く全般にわ

たるよう努め、*ESPB*の不備な点を指摘し、それと共に*ESPB*がこの七十年近くの間、功は兎も角、どういふ罪があつたかについても考えを纏めておきたい。

チャイルドは二十年以上の歳月をかけ、数多の古今の文献にあたり、千三百以上のヴァージョン (version) なり、ヴェリアント (variant) から成る三百五種 (species) の、彼の言う「ポピュラー・バラッド」を集め、各バラッドには、一篇のバラッドの歴史を書くのに時には十二ヶ国語にも及ぶ数百冊の書物を調べることあつたといふ程の〔註七〕比較バラッド学的頭註を付けた〔註八〕。こうして成つたこの、全巻合計二千七百頁に及ぶ *ESPB* は、確かに稀に見る偉業で、これを凌ぐものが現われることは先ずあり得ない。併し、この *ESPB* を利用したり、云々したりする場合に、我々は、これから述べる、その偉大さの影になっているこの *ESPB* の欠陥、そしてそれが後代にどう影響したかということを常に心しておくべきである。

## 一

最も問題になるのは、*ESPB* と題したバラッド集を編むに際して、夥しい数の文献から、何を排除し、何を収めたのかということである。チャイルドの博識に絶えず鼓舞されてきたガマリをはじめとした弟子達はごく当然に *ESPB* をほぼ絶対的なものとして受けとり、収録されている三百五種のバラッドが一つ一つ伝承バラッドであり、伝承バラッドの全てがここに収められていとうけとつた。この見方が他の人々、またその直ぐ後に続く時代の人々に影響を及ぼし、チャイルドのバラッド集が神聖視されてきたのであるが、その後にあらわせたチャイルド批判は主にこの点にかかわっているのである。つま

り、そういった見方は実は当っておらず、*ESPB* には伝承バラッドとは見做せないものがかなりあるのだということを、また、*ESPB* に含まれてしかるべきバラッドが少なからずあるのだといったことを指摘することを主としている。

その一つは、大まかに言えば、*ESPB* には、主に十六、七世紀に栄えた、日本の読み売り瓦版にあたるブロードサイドに刷られた伝承のものではない形のテキストがかなり多く含まれているということだと言えよう。総体的に見て、ブロードサイドは市井の歌謡作者が書いたものであり、民謡ではなく、俗謡と言ふべきものが大半を占めている。(これらには物語の要素のないものもあるが、大部分は物語性がある。) これらブロードサイドには伝承のものもその儘書きとめたものや、多少言葉使用を変えたものも幾つかあり、例えばチャイルドが *ESPB* に入れたものでは、一〇四番 "Prince Heathen" がそれである。こういったものをチャイルドが収録したのは当然のこととしても、それにまた、伝承のヴァージョンが発見されていて、そのブロードサイド版ということで附屬的にチャイルドがとりあげているのも当然としても、伝承のヴァージョンが見当らぬのに、ブロードサイドを、三百五種のうちの一つとして独立の番号を与えているのは妥当とは思えない。

中でも目立つのがロビン・フッドに関するバラッドで、これらは *ESPB* では一一七―一五四番に纏められているが、これらのうちの三分の二〔註九〕は明らかに個人の作その儘で、伝承バラッドの特質を備えておらず、ブロードサイドのみ存在していて、口伝えされ、伝承の形をとつたものは発見されていないのである。これらについてはチャイルド自身、とても読むに耐えられぬものだと言べている〔註一

O)。

チャイルドはこの *ESPB* に先立つバラッド集から、彼がいうところの、職業的歌手である吟遊詩人の作になるものを数多く除外して *ESPB* には収めなかったが、その意味では、同じく職業的歌手であるブロードサイドの歌謡作者達の手になるものも除外すべきではなかったのか。それに、数々のロビン・フッドに関する伝承バラッドを繋ぎ合わせて作られたと思われる十五世紀初頭の印刷物中にあるロビン・フッドの韻文物語は(一一七番)、伝承性はかなり留めてはいても、幾つもの伝承バラッドのテキストを繋ぎ合わせたのは吟遊詩人か、それに類した職業的歌手であった筈である。

また、数篇の、チャイルド言うところの「ミンストレル・バラッド」も果して、伝承バラッドと言えるものかどうかはつきりしない。寧ろ、短縮されたロマンスとでも言うべきかもしれない(註一一)。チャイルド自身、大いに疑念を抱きながらも、除去するための明確な理由がないとして、これらを含めている。

これらに加えて、まがいものが混り伝承のものにしても編者の手が入っているビータ・バハンの民謡集(註一二)を典拠とした幾つかのバラッドがある。チャイルドは一八五七—一八五九年版バラッド集にはこのバハンの民謡集から、疑わしいと思いつつも沢山のものを入れているが、*ESPB* では大幅に削減している(註一三)。*ESPB* でも、収録はしていても、チャイルドの満足のいくヴァージョンが他に見つかっており、それがために、厭々ながら、手の加えられたバハンのテキストを入れたこともある。併し、全く他に、断片という状態のものでさえ、伝承のテキストが見当たらないのに、推測だけでバハンのテキストを収録していることもあるのである。三〇四番 Young

Roland」はその一つで、その頭註にて(註一四)、チャイルドは、この一篇及び、同じく *ESPB* に収めた同様の数篇は(註一五)、価値のないもので、部分的にしる、明らかに贋物とわかっていながら、厭な気持を押さえて収めたのであるが、それは、これらが或る「本物の」(genuine)のバラッドの名残りを留めているか、又は本物が墮落したものであるかもしれないという微かな可能性のために収録したのである、という意味のことを言っている。併し、ロビン・フッドものも幾つかと同様、現にその本物にあたるものが、断片にしる、見当らない以上、推測の域を出ないのであって、これら紛物と判断したものを収めるのはおかしなことである。

併し、ところどころでチャイルド自身が疑念の言葉をはさんでいることから察せられようが、バラッドについては誰よりも理解のあったチャイルド程の人が *ESPB* の不統一や矛盾に気付いていなかった筈はない。このことは彼が *ESPB* を編むにあたって絶えず相談相手としたデンマークの偉大なバラッド学者グレントヴィグ(註一六)との、一八七二年から一八八三年(グレントヴィグ死亡の年)の約十年間にわたってやりとりした手紙を見るとかなりよくわかることである。チャイルドは特に、*ESPB* に何を入れ、何を除外すべきかという限界について、それに、収録するものをどう配列するかという点についてグレントヴィグの意見を仰いだ。もともとチャイルドは、真に「ポピュラー」とは言えないものは除外したい、それに伝承バラッドと見做し得るものの中から最も優れたものを、最も抒情性豊かなもののみを収めたいという気持があったのだが、グレントヴィグとの交通の結果、結局は、グレントヴィグの強い勧めで、「本物」のバラッドを全て、従って本物であるかもしれないもの、それに本物であったも

の〔註一七〕をも収めようという気持をもつようになったことがわかる。このことは、具体的には、例えば先にふれた三〇四番の頭註で述べられていて、三〇四番は贗物だとは思いつつも、何かすぐれたバラッドの名残りであるかもしれぬという微かな可能性を認め収録したのだと言った後に、友人のグルントヴィグの忠告に従っている一例であるという意味のことをチャイルドは言っている〔註一八〕。グルントヴィグの強い勧めで当初の気持が次第に変化し、チャイルドは選択の手を拡げてしまうことになり、疑わしいと思いつつも、その疑わしいものをも収録していくことになったのだとみてよいだろう。この気持の変化は、一八五七—一八五九年版バラッド集の第二版(新たな四篇を加えたもの)の、一八八〇年版のまえがきにある言葉(セルマ・ジエームズ、一三頁)にも示されているとみてよいだろう。そこでチャイルドは、「ポピュラー・バラッドは更に一層自由に取扱われて然るべきものである。比較的古いもの多くは毀損しているし、更に多くのもが甚しく改竄されて乱脈なものになっている、併し、それらの元のもの痕跡が少しでも残っている限りは、注目に値するのであり、私は受け入れた」と述べている。

こういうわけで、*ESPB*のバラッドの頭註をあれこれ見てもわかるように、チャイルドは、例えば、疑わしいものの主体となっているブロードサイドの場合、詩的に劣ると言いながらも、かなりのブロードサイドのテキストを収めているのは、伝承バラッドであったかもしれない、或いは、あるかもしれないという可能性にこだわったのである。ロビン・フッドの場合、ロビン・フッドの全体が主要なひとかたまりの民間伝承の歌だとみて、他に伝承のヴァージョンが

見当らないブロードサイドも敢えて含めたのであろう。また伝承性のないブロードサイドでも、一〇六番のように、未知の、また消失したものと優れた伝承バラッドの痕跡を留めているのかもしれないということでも収録したものもある。明らかに、伝承のヴァージョンを辿っていくと、もとうたがブロードサイドであるという場合もある。一六四番、二七番、二八六番はその例であるが、チャイルドがこう見做したものは数は少ない。或るブロードサイドが、ヨーロッパの伝承バラッドとか伝説に見られる要素と同じものを備えているので、そのブロードサイドを収録したという場合もある。二七二番はその例であるし、一〇五番もその一例だとみてよいであろう〔註一九〕。また、二八三番のように、伝承バラッドとは言い難いけれども、常民の間に流布していて、比較的新しい時代の、伝承バラッドを模倣した数多くの歌の一例としてとりあげられている場合もある。

チャイルドは、バラッドについての纏まった意見を書かずじまいで、*ESPB*の序文を書きかけたところでじくなくなってしまったが、その未完成草稿のはじめに、極めて自由に解釈した意味での、英語の「ポピュラー」・バラッドと言い得るものとその現存の全ゆるヴァージョンをこの五巻に集めた〔註二〇〕という意味のことを述べている。

つまりは、チャイルドはこの大仕事をやり遂げた段階では、厳密に考えれば、目論んでいたよりも度を越えてしまったと思っていたのだということがある。

なお、先に示したように、チャイルドには最も優れたものを、そして最も抒情味の豊かなもののみを収録したいという気持があったが、この美的判断は、何を伝承バラッドと見做すかの基準の主たるものになっていたのは確かだ、バラッドの頭註のあちこちで、非常に美しい

とか、読むに耐えられないといった評をしていることからわかる。チャイルドは、伝承のものであったかもしれない、あるかもしれない、ということ、ブロードサイドなどを収めたものが、その一方、大部分のブロードサイド・バラッドを拾わなかったのもこの判断によるところが大きい。また、伝承のものであっても、美的価値が低いために、不承不承ながら収めたというものもある。併し、そういった判断基準が、個々のヴァージョンやヴェリアントは別として三百五種という種を問題にすれば、(後に述べる春歌のように、チャイルドが故意に避けたものは別として)、バラッド学者が一般に考えていると思われる程には、この *ESPB* から伝承バラッドと言えるものをあれもこれも締め出したという程のことはないと思う。

*ESPB* の第五巻末にある、テキストの典拠となった文献の一覧を見ればわかるように、チャイルドは五十に近い手書きの稿本、それに二百を超える印刷物をバラッドのテキストの典拠として、十九世紀末という時点においての現存文献中に見られる伝承バラッドと見做されるもののヴァージョンとヴェリアントの大多数を集めたのであるが、それは大多数であって、チャイルド自身が、現存のあらゆるヴァージョンを、またそうまでは言い切れないにしても、殆どのヴァージョンを集めたと言っているのは当たっていない。チャイルドが見落したもの、また知っていて斥けたものが後になって時折指摘されている。例えば、五四番 “The Cherry Tree Carol” をそのスタイルの特性からバラッドと見て *ESPB* に入れるのなら、象徴的な美しさで人を惹きつける歌で、文学史などにもとりあげられてかなり知られるようになっていて、さる古稿本中の “Corpus Christi” (註二一) は

明らかにバラッドの特性を備えているし (註二二)、後に口伝えの伝承からそのヴァージョンが発見されてもいる (*Notes & Queries* 一九〇五年にシチウィックが発表)。一八六二年の *Notes & Queries* にも伝承のヴァージョンがあるというから (註二三)、チャイルドは稿本も、この雑誌上のヴァージョンもおそらく見落したのであろう。一八六八年に印刷された “The Seven Virgins” についても同じことが言える (註二四)。また、短いロマンスや、十六、七世紀の伝承バラッドの典拠としてチャイルドには極めて貴重なものであったパーシ所有の二つ折判稿本中の “The Blind Beggar of Bedhall Green” (註二五) は後になって口伝えのヴァージョンが発見されている。やはりチャイルドが恩恵を蒙ったジャミーソンのバラッド集の中の “The Shooting of His Deer” とか “Molly Bawn” とどう題で知られる歌も (註二六) 後に口伝えのヴァージョンが発見されている。“Still Growing” とか “My Bonny Lad Is Young” とか “The Trees They Do Grow High” とかいう題で知られている歌 (註二七) もチャイルドは除外している。一八九三年のブロードウッドとフラムメイトランドの民謡集 (註二八) 中の “The Bold Fisherman” もチャイルドは見知っていたのではないだろうか。

今指摘したものに加えて更に、チャイルドがおそらくは伝承バラッドだと見做しながら、故意に避けたと思われるものがある。それは内容がエロティックで、言葉使いが多少ともあからさまなものである (註二九)。例えば春歌 (Bawdy song) としては最古の歌である “A Talk of Ten Wives on Their Husband's Ware” (註三〇) というバラッドがあり、これは現代にまでうたい継がれており、そのヴァージョンのどれかにチャイルドが出会していないとは思えない。ま

た、同じく古典的な春歌“*The Sea Crab*”はイギリスでは、文献上最も古くはパーシ所有の二つ折判稿本(一六五〇年頃のもの)にあるもので(註三二)、数世紀にわたってうたわれており、現代でも様々な題名(註三三)で知られ、英米各地にうたい伝えられている伝承バラッドである。

このパーシの稿本は勿論、先述の通り、チャイルドが*ESPB*を編むに際して、多くのバラッドの典拠として利用したものであり、F・J・ファーニヴァルと共に、パーシ家から一世紀の間秘蔵されていたその稿本を見せてもらうべく非常に骨を折った。そしてこの稿本を印刷して出版することをチャイルドは要求し、編集に参加するつもりでもいたのだが、厳正で勇気のある学者ファーニヴァルがエロティックな歌謡も当然印刷すべきだと強く主張したのに対し、チャイルドは同意出来ず、とうとう編集から手を引いてしまったという(註三三)。ここに示されている、この十九世紀後半のアメリカの学者チャイルドの清教主義乃至はヴィクトリアニズムは、*ESPB*の欠陥のもとになっているといっても過言ではないであろう。*ESPB*には幾つか性に関することをうたったものはあるが、別に春歌と言える程のものではない。併し、それでも、*ESPB*を短縮した、サーチェントとキトレツヂの「学生版」*ESPB*(一九〇四年)は、一般の読者にはあからさま過ぎるという理由で五篇(註三四)を除外している。

兎に角チャイルドにとって、エロティックなものは大変苦痛なものであって、出来るだけ押さえつけたのだということがわかる。他に例を挙げれば、二七四番“*Our Goodman*”二七五番“*Get Up and Bar the Door*”には多くの「卑猥」なヴァージョンがあるのだが、チャイルドは収録していないし、二七九番“*The Jolly Beggar*”の

サミュエル・ビーブスのブロードサイド・バラッド蒐集に入っているブロードサイド・ヴァージョンは、チャイルドは印刷はしたものの数ヶ所を削除している。一一〇番“*The Knight and Shepherd's Daughter*”では十二のヴァージョンが挙げてあるが、そのうちのD、G、H、I、J、Lは、チャイルドとしては印刷したくない連があり、それらは削除されて星印にて誤魔化されている(註三五)。二九九番“*Trooper and Maid*”のヴァージョンDにしても星印で消された箇所がある(註三六)。

チャイルドがおそらく世間に対する体裁を気にしたために生じた、*ESPB*のこの欠陥は、その儘二十世紀のアメリカの民謡蒐集家や学者に影響し、殊にアメリカ各地で所謂チャイルド・バラッド(*ESPB*中のバラッド)を主体にした民謡蒐集が盛んに行なわれ、数々の学術的民謡集が出版されたが、バラッドに限らずエロティックなものは、若し蒐集されたにしても、決して印刷はされないか、又は印刷されても削除され、もとの形のもは大部分が原稿の儘保存されて公けにされていない。そして、この軽視出来ない分野であるエロティックなバラッド、延いては春歌全般の研究というものは最近まで殆んど手が付けられない儘であった。このことはアメリカの学者の清教主義とかかわりのあるものであることは言うまでもないが、併し、若しチャイルドが、エロティックな伝承バラッドをほんの数篇であれ、この偉大な、影響力の強い*ESPB*に番号を打って収めておれば、後代の学者は他の民謡より一段高く見ているチャイルド・バラッドの蒐集をするにあたって、そういったバラッドを無視するわけにはいかなかった筈であり、この面でチャイルドのバラッド集が後代に学術的にはよくない影響を与えていることは認めざるを得ないであろう。

さて、もう一つ *ESPB* の内容の範囲という点で問題になるのは、チャイルドの生きていた時代の、伝承バラッドをうたい伝えていた常民から直接蒐集したというテキストが極く僅かしかないということである（註三七）。アメリカで蒐集されたものは二十七程のバラッドの五十のテキストにすぎない。イギリスで蒐集されたものは、数ははっきりしないが僅かであることは確かである。一八八二年に刊行された *ESPB* 第一部の広告で（註三八）、チャイルドは、文通とか、印刷した回状をあちこちに回して、スコットランド、カナダ、アメリカ合衆国における口伝えからの蒐集を刺激しようと努めたが、今日はもう遅きに失しているであって、口伝えからの蒐集は乏しく、質の良いものはないと述べている。一つには、当時の学識ある人々が、まだ伝承バラッドが生きているということを知らなかつたということであろうか。兎に角、このチャイルドの失望は、彼が既に抱いていたと思われる些か好古的なバラッド観を一層強くしたようである。チャイルドは、伝承バラッドの最盛期は既に終わったのだとみていたが、これは当っているにしても、それがかなり前の時代に終わってしまったっており、古いバラッドは常民の間では事実上もはや口伝えされていないのだと考えた。グルントヴィグあての手紙の中で、一、二ヶ所から六つ程、優れたバラッドのテキストを受けとったけれども、どうも自分にはどれか最近の印刷物で読んだものを思い出してうたわれたものではないかと思われる。それが口伝えにより発展していった非常に好ましくないものだ（註三九）、などと述べている。勿論、かなり忠実に、印刷されたものから思い出されたものであれば、チャイルドの言う通りかもしれないが、これは、この言葉の前後からも判断出来るように、チャイ

ルドの、同時代に直接口伝えから文字に記録されたものに対する消極的な態度をよく示している。また、一〇番「The Twa Sisters」の頭註で、これは英国諸島ではもはや伝承されていない数少ない古いバラッドの一つだ（註四〇）、と述べているが、実はこのバラッドは二十世紀に入って、かなり最近に至るまで、イギリス、アメリカの各地の常民の口から、百以上のヴァージョンやヴァリアントが発見されている。

バラッドは消滅どころか、チャイルドの時代にはまだまだ根強く生きており、チャイルド以降の、口伝えから直接蒐集された学術的民謡集を見れば一目瞭然、*ESPB* 中のバラッドの多数が二十世紀に入っても依然として伝承されており、或る程度は今日に至るまで伝承されている、数多のヴァージョンやヴァリアントがイギリスで、また殊に盛んにアメリカ合衆国の英系移民の子孫の口から蒐集されている。（アメリカでは *ESPB* 中の約百五十種が二十世紀に入っても伝承されている）。また、その蒐集の仕方、チャイルドが対象とした文献の大部分とはちがって、学問的に厳密になっている。

それに、伝承バラッドは伝え続けられていたというだけではなく、新たに伝承バラッドを作り出す力さえも、最盛期は過ぎたとはいえず、アメリカ各地で蒐集されているバラッドの中でも、チャイルド・バラッドよりも多く発見されている、イギリスのプロードサイド系のバラッドの多くのヴァージョンを見るとわかることで、チャイルドのいう「ポピュラー・バラッド」と同等のものと見做し得るバラッドがかなり見出されているのである。十八世紀、そして十九世紀初頭にイギリスのプロードサイドが、輸入されたり、アメリカでリプリントされた

り、数百の歌集の中に含まれたりして、アメリカに普及したが、これらが印刷物から離れて口伝えされていく間に、美的考慮を別にすると、チャイルドの考えていたバラッドと並べて置ける歌に変化しているというものが多くあるのである。(ブロードサイドかどうか起源ははっきりしないが、口伝えされていく間に、伝承バラッドと交らぬものとなった歌も幾つかある)。例えば十七世紀のイギリスのブロードサイド・バラッドで、アメリカにて口伝えの間に伝承バラッド化しているものに、“The Three Butchers” “Locks and Bolts” “The Miller’s Will” などがある。よくうたわれてきたものでは、他に “Pretty Polly” “The Butcher Boy” “The Drowsy Sleeper” “In Bruton Town” (“Bramble Briar”) などがある。

ここでは、イギリスよりも民謡蒐集の盛んなアメリカの場合を述べたが、イギリスにも、幾分の差はあってもアメリカにおけるイギリスのブロードサイドのスタイルの変遷と同様のことは言えるのは勿論である。“In Bruton Town” はイギリスでも伝承バラッドとなりきったヴァージョンが発見されているし、それに学者間でもっと有名な “The Biter Withy” があり〔註四一〕、多数のウェアリアントが発見されている。

先にも述べたように、チャイルドが、伝承バラッドのスタイルではないブロードサイド・バラッドではあるが、他国に同様の物語の要素をもったバラッドがあるということで、それを伝承のものであったかもしれないと判断し、*ESPB* に収録したものが幾つかあるが、後にそのブロードサイドが口伝えのものとして括まり、言い回しなどが変化したし、伝承バラッドになっていったものもある。一〇五番、二七二番はその例で、これらはどちらもテキストはブロードサイドのテキスト一

つだけしかないが、これらの歌の伝承のヴァージョンがアメリカでは夫々約二十程蒐集されていて、明らかにチャイルドは躊躇することなく *ESPB* に入れたであろうと思えるスタイルになっているものが多い。

*ESPB* 崇拜が尾を引き、ともすれば一般には、英語の伝承バラッドは *ESPB* に始まり、*ESPB* にて終るという見方が仲々改まり難いのが実情である。バラッド蒐集家達でも、それ程ではないとしても、チャイルド・バラッドを、*ESPB* がないバラッドと区別して、一段高く貴重視しがちなきらいが身についてしまっていることが多い。歴史的に見れば、明らかに、チャイルドが一堂に集めたバラッドと、チャイルド以後に蒐集された伝承バラッドになりきった歌とは夫々時代的に隔りがあり、時代による変化も全般的には見られるが、我々は伝承バラッドを論じる際に、伝承バラッドというものを作り出す力はチャイルドの時代はおろか、それ以後にも存続してきたのだということを認識しなくてはいけない。

## 二

次に、チャイルドが *ESPB* において三百五種のバラッドをどのように分類し、配列しているかという問題がある。分類配列については、先に述べた、どのようなものを収録し、どのようなものを除外すべきかという問題と同様、チャイルドがグルントヴィグに相談した主要な事柄であったが、グルントヴィグは、分類配列については明確な返事を洩り、従ってチャイルドがその点について決定するのはかなり遅れてしまった。結局はグルントヴィグは、気がすまない儘にもチャイルドに回答し、あなた自身でやるべきだと言ったりしながら



ら、彼の考える分類を示して、二百六十九のバラッドのリストを送っている。そして、グルントヴィグは、英蘇バラッドの分類はデンマークのバラッドの場合と同じように、題材によってなされるべきではなくて、詩形によるべきだと述べ、先ず、各行四強勢で、各行の後に繰返し句が伴うものを一纏めに、次に四行連で奇数行が夫々八強勢あり、偶数行が夫々六強勢あるもの、次に四行連で各行八強勢あるもの、という韻律をもとにした分類が自然で歴史的であると勧めている〔註四三〕。つまり、二行連を、連型としては一番古いとグルントヴィグは見做している。チャイルドは、自分には思いつかなかったこのグルントヴィグの考えを合理的配列の仕方だと認めており、一八八二年に刊行された*ESPB*の第一部では明らかに、この連構造を分類基準にした方法に従おうとしているのがわかる。

第一部〔註四三〕は一番から二八番までで二十八種のバラッドから成っているが、一見したところ、成程繰返し句を各行の後に伴った二行連のバラッドばかりが並べてある。併し、これらのバラッドのヴァージョンを比較してみると、この連型とは一致しないものがあれこれあり、分類基準が曖昧であることがわかる。二行連自体にしても、各バラッドによって、韻律上の相違が認められるし、繰返し句にしても種類は色々あり、それらが分類されているわけでもない。また、連型による配列は一見年代順であるかとも思え、第一部には最も古いものが入っているが、かといって十九世紀になってはじめて知られたというバラッドが五種入っていたりもする。

更に見方を変えて、並べられたバラッドの内容を見ていくと、二行連を第一部として纏めたその分類の中で、更に、類似した主題のものをひとかたまりづつ並べるといふ試みもなされていることがわかる。

と云って、*ESPB*中の、夫々類似した主題のもの全てがここに集められているというのではない。一番から三番はなぞなぞもの、四番から九番が超自然的力をもったものによる花嫁略奪譚、一〇番から一六番が近親相姦的なものを含めた家族悲劇もの、一七番から一九番が中世ロマンスの短縮されたもの、二〇番と二一番が母殺しもの、二二番と二三番が聖書中の事柄をうたったもの（二一番もこの分類に入る）、二四番から二六番が恋愛関係もの、そして二七番と二八番にはヴァージョンが他にない断片のものが並べてあるが、これは、幾つかの断片のものを第十部の巻末に全部纏めるのも体裁上おかしなことと、第一部の締め括りに先ずは二つばかりくっつけておこうということらしい。

第一部が出た二年後の一八八四年に*ESPB*の第二部が刊行され、これには二九番から五三番までのバラッドが入っているが、第一部でみた内容上の分類がこの第二部にも殆んどそっくり見られる。それは記されていないが、中世ロマンスを主題としたもの、超自然的恋愛もの、なぞなぞもの、花嫁略奪、近親相姦を暗示する家族関係もの、ロマンティックな恋愛ものと分類されているのがわかり、これに聖書ものを加えれば、内容の変化は第一部にそっくりである。

第三部以降にはこれらの内容とはちがったものに、ロビン・フッドもの、擬似史実もの、明白に時代的に新しいロマンティックな恋愛ものがあり、これらは資料の入手が遅れたとかいうような理由で後回しにされたことだが、これらを除けば第三部以降に出てくるバラッドの内容なり主題は全て、第一部、そして主題分類上その繰返しと云える第二部に示されているのである。

つまり、チャイルドにはグルントヴィグに勧められた、連型による

分類のことが念頭にあったにせよ、この第一部、第二部は明らかに、これから何年もかけて、全体を十部に分けて少しずつ刊行していく *ESPB* の全体の内容の多種多様さを見せ、言わば *ESPB* の見本として予約購読者を惹きつけ、*ESPB* がどれだけ内容上の拡がりがあるものかということをはっきり示すために目論まれたものだと言いつつてよいであろう〔註四四〕。

これら第一部、第二部を見れば、第三部以降の分類についてはこまかく詮議するまでもなからう。これだけで、*ESPB* 全体にわたって別にはっきりした分類配列の目論みがチャイルドにあったとは思えないことがわかる。ロビン・フッドものだけは目立って、一纏めに並べてあるが(二一七—二五四番)、全体は総じて分類配列に曖昧なところがあり、チャイルドも頭註で、このバラッドはどこそこに並べるべきであったとかいったことを述べたりもしている。それに、*ESPB* の若い番号のバラッドの派生的なものと思えるものが独立の番号を付けられて後続巻に入れてある場合が幾らもある。これらは大体二四九番あたり以降のバラッドであるが〔註四五〕、寧ろ、若い番号の類似した主題のバラッドの附録とでもして、くつつけるべきであったらう。また、それらの幾つかにも共通したことが多く、二四九番以降にはチャイルド自身が怪し気だと疑った儘収録したバラッドが追いやられている(これらにはバハンのテキストが多い)。つまり、収録したものかどうか決めかねたものは後回しにされていることが多い。それにまた、一一三番 “The Great Silkie” の場合のように、もっと早く見つけていれば、四〇番の後に入れるべきであった、というように、既に刊行し始めてから発見したものが後回しにされている例もある。

配列ということでもう一つ問題なのは、*ESPB* のバラッドのテキ

ストの配列が、*ESPB* が偉大であるだけに、大方のバラッド学者の通念となつていて、バラッドというものの歴史的發展を顧慮しない一纏めに静的に見る見方を助長したということである。一応第一部には古いと思われるものが多いし、終りの方の部にはチャイルド言うところの「モダン」なものが多いが、他の分類の仕方が混り合つてもいいで、矛盾している。バラッドの歴史、また時代性というものについてはチャイルドの考えは判然としないが、若し、チャイルドが、バラッドというものの歴史とか、各バラッドの時代性というものについて一定の見識をもち、*ESPB* において、例えばテキストの記録された時点を基準の一つにした年代順を考慮した配列法を工夫しておれば、後の時代の今日に至るまでの学者に一般的になつていく個々のバラッドには年がない、一つ一つのヴァージョンが文字に記録されたのは偶然なのであって、その記録された時とバラッドの年とは関係がないという見方が、こんなにまで侵透することにはならなかったのではないかと思われる〔註四六〕。

### 三

上記の問題とは些か趣を異にしたもう一つの問題は、民謡そのものの全体を把握することに係りのあることである。バラッドを含めて、民謡は歌であつて、言葉と共に音楽がある。形式的にも情緒的にも、テキストの変遷においても、テキストの歴史を解明することにおいて、民謡のテキストと曲 (tune) は切り離せない相互関係にある。チャイルドは歌のテキストについて、その詩について偉業を成し遂げたのであるが、歌の言葉を生かしてきた音楽は殆ど顧ていない。バラッドというものの全体をみる点では、*ESPB* に音楽がないということ

は大きな欠陥である。*ESPB*の第十部には、収録バラッドの、かつて印刷された曲の短い索引(四〇五―四〇九頁)、それに稿本に出ていたバラッド曲五十五曲の楽譜が入れてはあるが(四一一―四二四頁)、これはただ並べただけの付け足しに過ぎず、しかも索引は他人の手になるものであり(アバディーンのウィリアム・ウォーカー)、これらの旋律については全然評言もなく、分析もされていない。

これは思うに、チャイルドが言語学者であり英文学者であったこととは別に、或る程度は、同時代の口伝えのものに直接自らあたってみることをせず、殆ど頼らなかったということに原因があるのではないだろうか。これは彼のバラッド観とも係りのあることは前にも述べた通りで、同時代の口承のヴァージョンは僅かしか手に入らず、しかも彼から見ても満足なものはないということが、バラッドの繁栄は遠く過ぎ去った過去のもので、バラッドは今では消失してしまふところだということと互いに手をとり合い、同時代に伝承されているヴァージョンに対して一層消極的態度をとらせるようになったと思われるが、このことが、現にうたい出されるバラッドの本来の姿を観察せずじまいにし、バラッドは歌であるということとは恐らくわかってはいても、音楽あってこそ言葉は生き長らえてきたのだという音楽の重要性に気を付けさせなかった原因の一つと言えるかと思う。しかも、チャイルドが対象とした過去の文献は過去に逆上れば上る程、音楽の紙面上の記譜は極めて乏しくなり、音楽は一層チャイルドの目には軽く映ったわけだとも考えられる。勿論、かなり近い時代の稿本や同時代の人々の稿本が曲を顧ていないということもある。併し、同時に、イングランドの、十九世紀半ば頃からの民謡への関心は音楽に重点を置いていたということも付け加えておきたい〔註四七〕。

兎に角、この欠陥は後の時代に大きく影響し、トマス・パーシ、そしてウォルタ・スコット以来の、殆ど民謡を文学的関心のみの対象とする傾向を二十世紀に持ちこみ、言葉の面に対するのと同様の、音楽の面に対する関心のあらわれを遅らせてしまった。更に言えば、民謡を民俗学の対象として、バラッドをうたう人々の生活におけるバラッドの機能、うたう人々、きく人々の感情といったことに対して学者が関心をもつのも遅れてしまった。これらのことは、チャイルドの*ESPB*以前にはアメリカに存在する民謡に対する関心は極く弱いものであったから尚更であり、チャイルドの*ESPB*が出てはじめて、アメリカの大学の研究者が、アメリカに民謡があることに関心を持ちはじめたのである。その場合、チャイルドが英文学者であり、文学的関心から編んだ*ESPB*であっただけに、チャイルドに接して、また*ESPB*を通してバラッドに関心を抱いた人々は英文学の教師が殆どであり、当然、テキストのみを対象とする扱い方が支配的になったのである。確かに、英系民謡の蒐集がイギリス以上にアメリカで盛んになったのはチャイルドのお蔭であり、数々の民謡集が刊行されたが、それと同時にチャイルドの影響が強いために、*ESPB*の内容を超えた民謡には強い関心は仲々向けられない儘であったし、しかも文学的観点から眺められて、テキストが集められ、そのテキストは比較分析の対象となるだけであった。曲は勿論のこと、民謡の機能や、歌の様式(スタイル)には尚更学問的関心は向けられなかったのである。つまり民謡は民間伝承のものでありながら、全般的に見て、民俗学の対象としては関心が一面的であった。

序で述べておくと、曲に対する関心は、イギリスの音楽家で民謡蒐集家であるセシル・シャープ(Cecil Sharp)がアメリカのアバラ

チア山脈南部で英系民謡を集めてから高まったと言えるだろう。シャープがオリヴ・キャンベル (Olive Campbell) と蒐集し、編纂して刊行した、傑出した民謡集 *English Folk-Songs from the Southern Appalachians* (ロンドン、一九一七年、一九三二年増補改訂、モード・カーペレイス—Maud Karpeles 編) 全二巻はテキストと曲の両方を記録し、それにアメリカの蒐集者のチャイルド・バラッドと同等に他の英系民謡にも関心を払って蒐集した。チャイルド・バラッドを別扱いする傾向は相変らず続くが、このシャープの民謡集がその後、学術的民謡蒐集書の規範となった。

曲の分析研究は大体、シャープの今なお価値のある *English Folk Song: Some Conclusions* (ロンドン、一九〇七年) にはじまり、アメリカでは今世紀初頭からフィリップス・パリが、民謡は言葉と音楽とから成り、曲は一篇の民謡の、テキストに対して、全体の半分なのであると曲の重要性を強調したが〔註四八〕、曲そのものの研究、また曲とテキストとの関係についての研究には仲々注意は払われず、一九四〇年代になってやっと、優れた英文学者であり、バラッド研究から一級の音楽学者ともなった B・H・ブロンソンが、*ESPB* 第五巻に収録してある五十五の曲をこまかに考究した〔註四九〕のをはじめとする優れた研究を発表しはじめ、更に曲とテキストの密接な相互関係について詳細に論じて分析研究を進めていっている。そして現在進行中の、ブロンソンの手になる、英米における現存の数多の文献と、録音レコードやテープに基いた、チャイルド・バラッドの曲集は、テキスト集 *ESPB* に対する曲集として、また、それ以上に、*ESPB* 以後のヴァーシジョン及びヴェリアントの曲でだけではないテキスト集としても価値のあるもので、*ESPB* と同様、イギリスの伝承バラッ

ドに関する限り、これに匹敵するものが他にあらわれることは先ずありえず、その完成が待たれている〔註五〇〕。

## 註

一、Francis James Child (ed.), *The English and Scottish Popular Ballads* (Boston, Houghton Mifflin, 一八八二—一八九八年)、全十部、後に全五巻。千部限定。一八九六年に、未完成の儘チャイルドは死亡し、第五巻は弟子のキットレッジ (Kittridge) がチャイルドの原稿を整理し、文献目録を作成して仕上げた。なお、チャイルドの言う 'popular ballads' の 'popular' は生成過程が「ポピュラー」ということであり、流行歌類を指して言う「ポピュラー」とは区別されねばならない。後者はその目的とするところが「ポピュラー」なのである。今では「ポピュラー・バラッド」に取って代って 'traditional ballad' と称されることが普通になっている。筆者はこれを「伝承バラッド」とこれまで訳してきた。

二、一九五六年に、五巻を三巻に纏めて、ニュー・ヨークのフォウクロア・プレスが限定五百部の写真復刻。これは明らかに著作権の期限切れを見計らって出版したのにちがいないと思われる。(この出版には現在民俗学者で、出版業もやっているケネス・ゴウルドステインが甚力) この後には、一九六二年にニュー・ヨークのクローバ・スクエアから同様のリプリントが出ているが、こちらの方は一九五六年版よりも部数は多いかと思われる。

三、ニュー・ヨークのドウヴァ出版の刊行で全五巻。第五巻末に W・M・ハート (Hart) の 'Professor Child and the Ballad', *PMLA*, XXI (1906), pp. 755-807 が転載されている。  
四、この点で、このチャイルドのバラッド集の題名に定冠詞 ('The') が付しているのは適切でない。

五、F. J. Child (ed.), *English and Scottish Ballads* (ボストン、一八五七—一八五九年)、全八巻。これはチャイルドの編纂した最初のバラッド集で、*British Poets* の一部として刊行された小型の書物。これを第一版とみて、*ESPB* をこの改訂版とみるのがよくある。この二つの間には、第一版に四篇だけ新しいものを加えた一八六〇年版がある。これは一八八〇年頃に至るまで何度かリプリントされており、日本の、東大や京大の図書館に所蔵されているものもこのリプリントであろう。なお、*ESPB* の一八八二—一八九八年初版は日本では、筆者の知るところでは、同志社大学英文学研

- 研究室に揃い、それに東京の或る個人蔵書中に揃いあると言われている。
- 六' Thelma G. James, "The English and Scottish Popular Ballads of Francis J. Child", *Journal of American Folklore*, XLVI (1933), pp. 51-68. この論文のあとに出たものとして B. H. Bronson (ed.), *The Traditional Tunes of the Child Ballads*, Vol. I (Princeton, 1959) の序文中の *ESPB* について論じた箇所 (pp. xiii-xviii) が示唆に富んだもので、特に *ESPB* におけるバラッドの配列と、収録したバラッドの範囲について論じている。筆者としては、当稿の「一」の初めの四分の一、それに「二」を書くにあたって、このブロンソンの論に負うところが大きい。
- 七' キートレットによる序文 "Francis James Child," *ESPB*, I, xxviii-xxix 参照。
- 八' 第五巻末の三種の文献一覧は全部合わせると九十頁近い。
- 九' 一四七、一四九—一五四番等。
- 一〇' グルントヴィグ (Grundtvig) にあつたチャイルドの手紙—Hustvedt, *Ballad Books and Ballad Men* (Cambridge, Mass., 1930), p. 254.
- 一一' 二九、三一番等。
- 一二' Peter Buchan (ed.), *Ancient Ballads and Songs of North Scotland* (Edinburgh, 1828), 2 vols.
- 一三' Thelma James, *op. cit.*—MacEdward Leach and T. P. Coffin (eds.), *The Critics and the Ballad* (Carbondale, Illinois, 1961) に短縮再録、その一四頁。
- 一四' *ESPB*, V, p. 182.
- 一五' これらは恐らく、二四九、二五五、二六三、二六四、二六五、二九一、三〇一番等を指しているものと思う。なお、アレグザンダー・キース (Keith) は Gavin Greig (ed.), *Last Leaves of Traditional Ballads and Ballad Airs* (Aberdeen, 1925) の序文の中で (pp. xix-xxxi) 'マンのバラッドのテキストは総体的には拠り所のあるものだと見ている。' 六' グルントヴィグには、規模において匹敵するのは *ESPB* の他に、なごと言われる 'A. Olrik 共編の *Danmarks gamle Folkeviser* (Copenhagen, 1853-1920), 6 vols. の他数冊の編書がある。'
- 一七' グルントヴィグの言葉—Hustvedt, *op. cit.*, p. 260.
- 一八' *ESPB*, V, p. 182.
- 一九' この一〇五番の頭註には、どうして収録したかの理由がはっきりとは述べられていない。それで T. P. コフィンが、これに似たブロードサイドは他にもあるのに、それらを捨てて何故これをチャイルドはとりあげたのか、と述べたのは、正確であるが (*The British Traditional Ballad in North America*, Philadelphia, rev. ed., 1963, p. 98) 少なくとも二、三番は同様の理由であつて、南欧諸国と同じ語のバラッドがあるからとりあげたのだとみても可い。
- 二〇' Child MSS., Harvard Library, Vol. XVI, p. 132—Bronson, *op. cit.*, p. xv. ヤレル・シムズは、この草稿のことをおそらく知らぬが、若し序文をチャイルドが書いていたとしたら、それは *ESPB* に何を選択して収録したかという原則の説明であると同様、当然弁護でもあったであろうと推測しているが、それは當を得たと言える。(Thelma G. James, *op. cit.*, p. 16)
- 二一' MS. Balliol Coll. 354, ed. E. Flügel, *Anglia*, XXVI (1928), p. 175—G. H. Gerould, *The Ballad of Tradition* (New York, 1932), p. 33n.
- 二二' ① "Corpus Cristi" *ESPB* 中の "The Cherry Tree Carol" (五四番) "Dives and Lazarus" (五六番) 'それに後にあれる "The Bitter Withy" "The Seven Virgins" 又それに、このはなれて古く十三世紀の稿本にある "Judah" (三三番) をヤレルとよび、バラッドと見做せたり立場の人があるが (David C. Fowler, "Toward a Literary History of the Popular Ballad," *New York Folklore Quarterly*, XXI (1965), p. 126) 筆者としてはスタイルに重点を置かずに、マクエドナルド・リーチが "Corpus Cristi" にあつて、おそらく何気なく使っている「ヤレル・バラッド」という言葉をとり (MacEdward Leach, "The Singer of the Song," *Singers and Storytellers*, ed. by M. C. Boatright and others, Dallas, 1961, p. 32).
- 二三' Gerould, *op. cit.*, p. 33n.
- 二四' William Henry Husk, *Songs of the Nativity* (1868) の初巻に印刷されたところ—Gerould, *op. cit.*, p. 33n.
- 二五' *Percy's Folio Manuscript* (London, 1867-1868), II, 281-289.
- 二六' Robert Jamieson, *Popular Ballads* (1806), I, pp. 193-199.
- 二七' ハーヴェートのキートン図書館がそのプロローグを所蔵—G. Malcolm Laws, Jr., *American Ballads of British Broad-sides* (Philadelphia, 1957), p. 243. 後の口承版は数々発見されている。

- 二八、Lucy E. Broadwood and J. A. Fuller-Maitland (eds.), *English County Songs* (London, 1893). この民謡集と『Sabin Baring-Gould and H. F. Sheppard (eds.), *Songs of the West* (London, 1889-1891)』はイギリス民謡がまだまだ口伝えでうたい続けられていることを示した。
- 二九、これら春歌とでも称せる伝承バラッドは、チャイルドが見落したバラッドを指摘した学者も気がつかないが、おそろしくは見えて見ぬふりをしており、二十世紀も半ばをすぎてはじめて、ガーシオン・レグマンが伝承バラッドと言ふものを含めて春歌全般に關した書誌的概観の文章を発表して、民謡学者の注意が喚起されたところである。—G. Legman, "The Bawdy Song in Fact and in Print," *Explorations*, 7 (March, 1957), pp. 139ff. —これは増補され、また削除されていた部分を無削除として、Legman, *The Horn Book* (New York, 1964) に再録された。この文章にはおそろしくアメリカでは民謡中の春歌というものに対して僅かながら学問的関心が向けられてきたところである。
- 三〇、最古のヴァージョンは一四六〇年頃の Ormsby-Gore's Porkington MS にあると云ふ (Legman, *op. cit.*, p. 414).
- 三一、*Bishop Percy's Folio Manuscript*, Supplement, *Loose and Humorous Songs* (London, 1868), ed. F. J. Furnivall, pp. 99-100. 春歌集であるこの出版されたパーシ稿本の補遺巻の解題、それにイギリスの春歌一般については拙著『英国文学エロティカ点描』(好文堂、一九六八年)、『五一—二六頁』また『世界春歌抄—イギリス・ドイツ篇』(自由国民主社、一九六九年)中の拙稿(一〇—三〇頁)も参照されたい。
- 三二、『"Cod Fish Song," "Good Morning Mister Fisherman," "John Henry and the Crab," "Lobster"』等。
- 三三、パーシ稿本中の春歌は註三一で述べた補遺巻に纏められて出版されたが、これには他の編集者も名前を出すことを拒否し、ファーニヴァル一人が編集者となって、一人刊行した。このファーニヴァルは勿論『*Oxford English Dictionary*』の立案者のあのフリーニヴァルで、ハーバート・コウリチの後、編集を引き継いだのだが、その後編集者に任せられた J. A. H. マレイがこの辞典から猥らな箇所を削除することを主張したので OED からはすっかり手を引いてしまったという人物である。
- 三四、『三三』二七九、二八一、二九〇、二九九番。
- 三五、『*ESPB*, II, pp. 467, 471, 473-476.
- 三六、『*ESPB*, V, p. 307.
- 三七、これは一つには、『*ESPB*』に収められた数々のバラッドのテキストが、果して学問的にみて、とれだけ正確に記録されたものかという問題とかかわる。チャイルド以前の民謡集や詞華集にある歌のテキストの場合、典拠が明示していないことが多く、また編者がテキストに手を加えている場合が多く、こまかくいって、テキストとしての真正さが疑われるものである。パーシ編の *Reliques of Ancient English Poetry* (一七六五年初版)中のバラッドとペーシ所有の稿本の原典との比較で、一般に我々もそうだった疑わしさは承知しているし、また全篇ウォルター・スコットの作かといいた疑われた一八六番『"Kinmont Willie"』の場合のように、かなりの部分に手を入れられている例もある。稿本の場合でも、常民の口から書き写したテキストに、今日の民謡蒐集者の記録のような、学問的厳正さは望みにくいのが普通である。
- 三八、『"Advertisement," *ESPB*, Part I (of Vol. I), p. vii.
- 三九、『*Hustvedt, op. cit.*, p. 263.
- 四〇、『*ESPB*, I, p. 118.
- 四一、『一八六八年の *Notes & Queries* (Series 4, I)』に断片がのっており(五三頁)、『一九〇五年にはシチウィックが同誌 (Series 10, IV)』に整ったヴァージョンをのせている(八四頁)。その後も口伝えのヴァージョンが採集されている。
- 四二、『*Hustvedt, op. cit.*, pp. 219-220.
- 四三、『以下、第一部及び第二部の分析は B・H・ブロンソンの説に従っている (Bronson, *op. cit.*, pp. xiv-xv).』
- 四四、『チャイルドは、また第一部が印刷されぬ前から、『*ESPB*』の第二版が若し出せるならば、配列は修正したいと云え言っている (Hustvedt, *op. cit.*, p. 239).』
- 四五、『二四九—二五三』、二五五番等。
- 四六、伝承バラッドの歴史的發展、時代性については、筆者としては、最近では D・C・フアラに時政を受け(フアラの論文は註三二を参照)、旧稿を改めた『バラッドと時代』で述べている—『英語文学世界』英潮社、一九七〇年三月号、一六一—一九頁。
- 四七、『スコットランド及びアイルランドでは十八世紀に民謡集が多数出たが、イングランドでは、音楽の面での愛国運動はずっと遅れて、十九世紀半ば頃になってイングランドにもスコットランド同様民謡はあるのだという国民的誇りに基いた民謡蒐集熱が出てきて、これがはっきりした形をとったのは十

- 九世紀も四分の三を過ぎた頃からであった。それがどちらかと言えは言葉よりも音楽に重点を置いていた。こういう民謡観に基づいた民謡蒐集、研究は二十世紀に入って、セシル・シャープの仕事や、一八九八年に設立された英国民謡協会の仕事で学問的にもじりじり進んだものになっていく。(D. K. Wilgus, *Anglo-American Folksong Scholarship Since 1898*, New Brunswick, N. J., 1959, p. 125 参照。なお、十九世紀の、イングランドの民謡に対する関心の高まりを詳しく、表面的に跡付けたものにフランク・ハウズの書いたものがあろう。Frank Howes, *Folk Music of Britain—and Beyond*, London, 1969, Chapter V, pp. 89-120.
- 四八 Phillips Barry, "Folk-Music in America," *Journal of American Folklore*, XXII (1909), pp. 72-81 等。ハリソンの後の、民謡の曲についての考査は、アメリカ民俗学協会にちりちり一八九〇年に一冊に集められた *Bulletin of the Folk-Song Society of the Northeast* (1930-1937) (Philadelphia, 1960) に散見される。
- 四九 Bronson, "Professor Child's Ballad Tunes," *California Folklore Quarterly*, I (1942), pp. 185-200.
- 五〇 *The Traditional Tunes of the Child Ballads*, Vol. I, 1959; II, 1962; III, 1966; IV, 1972

(一九七〇年八月)